

## 音と思いがかかわり，とけあう音楽科学習

---

---

### 1 感じて表現できる子

本校音楽科では、「感じて表現できる子」をめざす子ども像としている。「感じて表現できる子」とは、音楽のよさや特徴などを全身で味わい、表現する<sup>1)</sup>子どもの姿である。昨年度は、個人から集団へ目を向けることで、さらに、この「感じて表現できる子」の育成がはかれると考え、音楽的調和に着目した。

#### (1) 音楽的調和を求めて

音楽科授業において、子どもたちが、「感じて表現できる子」へ向かうとき、表現と感情を相互往復させながら調和を求めようとしている。子どもがこの調和を求めていく過程では、仲間や楽器、題材などがかかわりながら生まれたイメージをもとに表現をつくらうとしているのである。本校では、音楽の学習によって喚起されたものを音楽的イメージとした。そして、音楽的イメージを形成するために、楽曲を鑑賞したり、作品を創作したりして音楽にじっくりと触れさせる時間を設定した。また、言葉や文字や絵といったもので視覚的に表出させたり、体の動きや音楽で表現させたりして交流を図ることで、仲間と音楽的イメージを共有していくようにした。

#### (2) 音楽的イメージを深め、促すために

音楽的イメージを深め、促す授業のあり方として、自己モニタリングを取り入れた。その方法として、アンサンブル活動とSD法を用いた。これによって、子どもたちは、他者とかかわりながら自他を評価・確認したり、自分自身の表現をメタ的に捉えたりし、音楽的イメージを深める上で有効であると考えた。また、子どもたちの音楽的イメージを喚起するためには、クラシック音楽にこだわらず、様々なジャンルの音楽に触れる経験や環境を設定し、音楽のもつ特徴を身体を中心に捉えていくようにした。

このように、子どもたちが表現を高めていくためには、音楽的イメージを喚起し、深めていくことが重要であると考えている。そのために、音楽的イメージの共有化を促し、調和を求めていくための子どもの相互作用や教師のかかわりについて、具体的な一授業の中でのあり方を明らかにしたいと考えた。

### 2 音と思いがかかわり，とけあう

本年度は、研究テーマを「音と思いがかかわり，とけあう音楽科学習」と設定した。本校音楽科ではこれまで、仲間や楽器、題材といった「ひと」、「もの」、「こと」と子どもとのかかわりを考えて授業を展

開してきた。

例えば、「ひと」とのかかわりでいうと、グループ活動を設定して仲間と共にリズムパターンやダンスを創作する活動に取り組みせたり、SD法を用いて変化や気づきを交流し合う時間を設定したりした。「もの」とのかかわりでは、日本音楽を取り上げて和太鼓に触れさせたり、ビデオやDVDといった教材を用いて視覚的な情報を得られるようにしたりした。「こと」とのかかわりでは、外国の民族音楽を題材として取り上げ、その特徴的な演奏スタイルを真似たり、クラスソングをつくって記譜することを経験させたりした。このような取り組みを通して「ひと」とのかかわりが「もの」「こと」とのかかわりから得られる感情や表現をさらに高めると考えるようになった。

その中で、音楽的調和に向かう姿を示すものとして、本年度は「ひと」とのかかわりに焦点をあてていくこととする。テーマにある「かかわり」とは、子どもたち同士のかかわり合いを示すものであり、「音」と「思い」がとけあうために、子どもたち同士のかかわり合いを重視していくのである。

#### (1) 子ども同士のかかわり合い

音楽科授業において、まず、子どもたちは、仲間や教師とともに新たな題材や音楽に出会い、何らかの音楽的イメージを抱きはじめる。次に、クラスの仲間やグループの仲間と創作活動や表現活動を行うことで、仲間とのかかわり合いをもつ。そして、仲間とのかかわり合いを通して思い浮かんだ「音」や「思い」を共有することで、新たな考えを知ったり自分の考えが明確になったりする。このような過程によって、音楽的イメージは深まっていくと考える。また、このような子ども同士のかかわり合いを深めていくことによって、互いの表現を見合ったり聴き合ったりすることができ、自分たちの表現を捉えるようになっていくのである。そして、互いの表現を見合ったり聴き合ったりすることは、自己モニタリングすることであると捉えている。

#### (2) 教師のかかわり

音楽科授業において、子ども同士のかかわり合いを促すためには、教師が子どもたちの発言や表現をつないでいくようかかわることが必要である。なぜなら、教師も子どもも互いに影響し合う存在であり、教師が子どもたちにかかわったり、子ども同士をつないだりすることによって、イメージをふくらませたり、表現を高めたりすることができるからである。教師が子どもたちをつないでいく方法としては、子ども同士がともに創作活動をしたり表現を工夫したりできる場を設定することがあげられる。その中には、新たな音楽文化に触れさせたり、教材を工夫したりして、子ども同士のかかわり合いを深めることが必要である。また、音楽的な諸要素をとらえさせるために、身体表現を取り入れるなど活動を工夫することも必要である。これらのことを、相互に関連づけ、音楽的調和に向けて表現を高めさせたいと考えている。そして、このようなかかわりの中で表現を高めていくために、互いの表現を認め合ったり育て合ったりして「音と思いのかかわり合い」を大切に考えている。

### 3 音と思いのかかわり合い

「音と思いのかかわり合い」とは、子どもたちが仲間とともに音楽にかかわることで、互いに表出する「音」やそのときに起こる「思い」を受けとめ合い、新たな表現を追求しながら作品を作り上げていこうとするものである。子どもたちが、この「音と思いのかかわり合い」を形成していくためには、互いの表現を見て受けとめ合う場を設定することが必要である。ここでは、この音と思いのかかわり合いを形成していく場として、アンサンブル活動を例にあげて述べていく。

#### (1) 「音と思いのかかわり合い」を形成していくために

アンサンブル活動は、少人数の演奏形態である。しかし、ここでいうアンサンブル活動は、器楽アンサンブルに限ったものではない。創作活動や歌唱活動など、多様な表現活動を含むものとして捉えている。これらは、少人数による活動のため、クラス全体での活動に比べ、表現する内容について自ら発言したり、苦手な表現について教えを求めたりしやすくなる。そして、それらに対する他者の意見やアドバイスもダイレクトに受けとることになる。このような、子ども自ら「音」や「思い」を交流し合う関係を築くことが、自他の表現について見直し、新たな表現を求めて作品をつくり上げていく「音と思いのかかわり合い」へとつながる。しかし、このような「音と思いのかかわり合い」は子どもたちだけで自然にできるものではない。その過程においては、教師はかかわり合いの場を設定するだけでなく、コミュニケーションを促したり、子どもが創造する表現に意味づけ、価値づけしたりして、ともに音楽とかかわっていくことが必要である。

#### (2) 「音と思いのかかわり合い」が音楽的調和に向かうための要素

アンサンブル活動をはじめとする様々な音楽的活動が「音と思いのかかわり合い」を形成し、音楽的調和に向かっていくためには、図1で示すように、次の4つの要素が必要であると考えてきた。A.自分の役割を果たす、B.互いの役割を知る、C.全体の表現を確認する、D.全体の表現を追求する。この4つの要素は、形成される集団の性質によって相互に作用したり循環したりしていくことで、子どもが「表現のまとまり」や

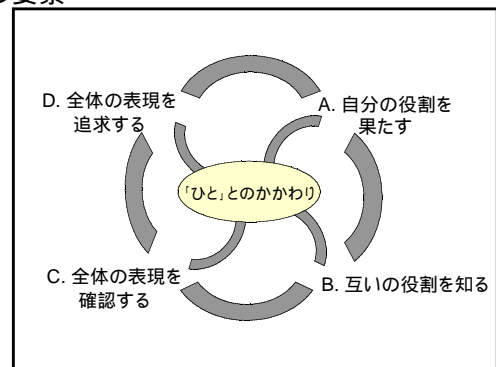


図1 「音楽的な調和」の試案

「仲間との一体感」という調和を求めていくと考えている。上記4つの要素を授業における子ども同士や教師のかかわりで述べると次のようなこととなる。

#### A. 自分の役割を果たす

「自分の役割を果たす」というのは、自分のパートを正確に演奏したり、仲間と動きを合わせて最後まで表現をしたりすることである。しかし、実際の子どもの姿で述べると、グループ内には技能の差異がある場合もある。そのような場合は個人練習だけでなく、子ども同士が教え合うことで役割を果たしていけるようになると思う。教師も個にかかわって知識や技能面の援助をするだけでなく、子ども同士の教え

合いの場を設定したり、コミュニケーションを促す声をかけたりすることが必要である。

5年生の題材「冬景色」では、歌詞の様子に合った歌い方をグループで工夫する活動に取り組んだ。活動には、グループで互いに見合ったり聴き合ったりして教え合いをするようにした。子どもたちは、互いの表情や声をじっくりと鑑賞し合い、「声が小さいな」「強弱があまりかわってないな」といったアドバイスをし合うようになった。教師のかかわりは、歌声の小さいグループに入って一緒に歌ったり、表現のわかりやすい子に歌って聴かせるよう、かかわり合いを促す声をかけたりすることである。

#### B. 互いの役割を知る

「互いの役割を知る」というのは、自分のパートが主旋律であるのか、伴奏パートであるのかなどを意識しながら演奏することである。また、曲の構成を考えて、それぞれの部分に合った曲づくりをすることもあげられる。教師のかかわりでは、そのパートの役割に合った演奏の仕方や曲の作り方に気づかせたり促したりすることがある。

3年生の題材「チャ・チャ・チャのリズムでアンサンブル」は、グループ内にリズムリーダーをつくり、息の合ったアンサンブルをしていく活動である。教師は「息の合った演奏をするためにはどうしたらよいか」という問いをなげかけ、子どもたちにリーダーと他のメンバーの役割を考えさせるようにした。そして、リーダーは演奏のタイミングを合わせるために体の動きで合図を出すこと、他のメンバーはそのリーダーの動きを見て演奏を合わせることを確認した。子どもたちは、自分の役割に応じて、合図を示す動きを考えたり、リーダーを見ながらリズム演奏したりして、相互の立場を意識して演奏するようになった。子ども同士をつなぐ教師のかかわりは、それを促すために、リーダーを見るように声をかけたり、リーダーにわかりやすい動きをするようアドバイスをしたりしていった。

#### C. 全体の表現を確認する

「全体の表現を確認する」というのは、子どもたちが互いのグループの演奏や表現を鑑賞し合って振り返り、音量のバランスや演奏のタイミングといった工夫点や課題に気づくことである。そのために、相互鑑賞会を設定した。まず、演奏者として仲間とともに音を合わせようとする中で、タイミングや声の出し方を予測しながら演奏しようとするができるようになる。そして、全員が鑑賞者として聴く役割をもつことは、子どもたち全員がそれぞれの表現に気づいたり、自他の演奏を比較して「ここが原因のようだ」と気づいたりすることができる。教師が子ども同士をつなげるかかわりとしては、子どもたちが気づいた工夫点に価値づけして全体に広げることがある。また、他グループのアドバイスによって気づいた課題をグループごとに焦点化することで、次なる学習のめあてをもたせることもある。

3年生の題材「チャ・チャ・チャのリズムでアンサンブル」では、相互鑑賞会としてリハーサルを設定した。子どもたちは、演奏者の立場になることでグループ全体を見合い、リーダーの動きをもとに出だしのタイミングをはかって演奏を始めた。演奏中も、リーダーの動きと互いの音に意識を向かわせて、タイミングの合った演奏をすることができた。鑑賞者の立場では、「もっと見合った方がいい」「演奏がばら

ついている」といった他グループの課題を見つけアドバイスをし合った。また、「アクセントがわかりやすい」「演奏開始の合図がわかりやすい」といった他グループの工夫点に気づいた発言もみられた。教師が子ども同士をつなげるかかわりとしては、まず、この活動を通して意識したところを子どもたちに問いかけ、「演奏を合わせること」「お互いに見合うこと」の2点を鑑賞の共通のポイントとして確認することである。次に、他のグループが気づいた課題に対して「演奏がばらつくのはなぜか」という問いかけをすることで「リーダーをあまり見ていない」という課題に焦点化し、「リーダーをもっと見て息を合わせよう」という次なる活動のめあてがもてるようにすることである。工夫点については、「特に強く演奏しているところがあって、アクセントがわかりやすい」「リーダーの動きが大きくて合図がわかりやすい」という価値づけをし、他のグループにもできるところは取り入れて表現していくよう声をかけた。このことから「ぼくたちもアクセントをつけるために強く音を出そう」といった表現の工夫へとつながっていったと考える。

#### D. 全体の表現を追求する

「全体の表現を追求をする」というのは、グループごとの課題をもとに、どのくらいの音量がよいのか問い直したり、どのような音色がよいのかを追求したりして新たな表現の工夫をしていくことである。子どもたちは、アンサンブル活動が進んでいくと、「自分たちの作品や演奏を発表したい」と発言するようになる。しかし、発表の場をもつだけでは表現の高まりは期待できないであろう。なぜなら、発表したことに対して互いに批判を受け、交流し合う中で刺激を受けて新たな表現を創り出していくと考えるからである。そこで、相互鑑賞会後に高め合いの場をもつこととした。高め合いの場とは、自分たちの表現を改善することである。子ども同士をつなぐ教師のかかわりとしては、よい表現をしている子どもを取り上げて鑑賞させることで課題を改善していくための方法や技能を示すことがある。また、課題となっていることが改善されているかをグループ内で問い直すように促すことなどがある。

3年生の題材「物語の音楽をつくろう」では、リハーサルを行った後、自分たちの表現を見直し、改善する時間を設定した。子どもたちはリハーサルで出た課題をもとに、演奏がつまるところを教え合って練習したり、強弱をつけて演奏したりするようになっていった。そして、次第に、個人の練習から、お互いが見えやすい場所に立ち位置を変えたり、互いの音量を確認し合ったりする姿が見られるようになった。子ども同士をつなぐ教師のかかわりは、息の合った演奏をしているグループを取り上げて新たな方法を示すことがある。また、強弱などのわかりやすい演奏をしている子どもの様子を見させて、楽器の奏法の違いに気づかせ、よりグループ全体の表現が高められるようすることができる。

これらのことを通して、子どもが自分たちの表現に気づき、仲間と思いうかんだことを共有し、深め合いながら、音楽的調和へとつながることを期待したい。

(今井優子・須原友紀)

#### 参考文献

- 1) 兵庫教育大学附属小学校(2006)「学ぶこと」と「教えること」の共鳴(1年次) p 76